

ウズベキスタン、フェルガナ地方における 今日のピール崇敬について

菊田 悠

本発表では、イスラーム世界における職業団体のいわゆる守護聖者的な存在であるピールというものが、今日のウズベキスタンのフェルガナ地方においてどのように崇敬されているかを報告した。フェルガナ地方南端の町リシタン¹はウズベキスタン有数の陶磁器の生産地であり、この町の陶工の間ではソ連時代を経た今日でも、ピール崇敬が一定の重要な役割を果たしている。本発表は主にこの陶工によるピール崇敬を扱った。主要なデータは2002年3月から2003年にかけての約1年半、リシタンにて行ったフィールドワーク²に基づくものである。

ピールとは、ペルシア語の形容詞「年老いた」かつ名詞「老人」に語源を持つ言葉であるが、リシタンにおける現在（調査時を現在とする民族誌的現在）の用法は、次の3つに分けられるといえよう。まず一つ目として、「その職業における始祖、聖者としてのピール」という意味で用いられる場合があり、これが最も一般的な用法である。次に、職能を自分に直接教えてくれた師匠や、スーフィーの直接の導師をピールと呼ぶ。最後に、研鑽によってある職能が高度なレベルに達した者に対して、直接の師匠と弟子関係にあるか否かを問わず、尊称としてピールと呼びかける場合がある。現在では主要な産業以外のピールに関しては人々の知識があいまいであり、職業間のヒエラルキーやピールのシルシラは、あまり意識されていなかった。

リシタンの陶工の間では、陶業のピールとして以下の二人が広く知られている。まず、陶業の始祖としてアミル・クロール（?-1371）がおり、その弟子で数々の超人的技を持ち、師匠をして「お前こそが陶業のピールだ」と言わしめたというバハウッディン・ナクシュバンディー（1318-89）は、最も偉大な陶業のピールとして挙げられる。この二人はブハラやサマルカンドなど他の中央アジアの主要都市でも陶業のピールとして陶工を中心に知られているが、リシタンではその他に地元でしか知られていないピールたちも存在する。それらに関する伝承や崇敬の内容を検討していくと、実在した腕の良い地元の陶工が、死後に非日常的なエピソードに彩られて聖性が加味されていき、ピールの領域に入っていくという流れがうかがえるようである。

アラビア語でリサーラ (risāla)、あるいは現地でヌルノマ (nurnoma) と呼ばれている職業ごとの守護聖者や行うべき儀礼、職の始まりに関する伝承などが記されている書は、現在、ウズベキスタンではウズベク語による廉価版が各種出版され、バザールやモスクの前の出店などで売られている。リシタンでも気軽に手に入れることができた。しかし、陶業について記したヌルノマはなく、陶工たちもそれを見つけれないでいる。この点に関して 1950 年代末にソビエト民族学者が、リシタンにおける陶業のヌルノマは 20 世紀初頭にその権威が失墜したために消滅したというエピソードを記しているが、現在の陶工たちはヌルノマの権威を否定はせず、逆にいつか復活する物として期待を持っている。

現在の陶工の生活においてピールが関わるのは、まずウスタ・ローズ (usta rozi)、あるいはアンジュマン (anjuman) と呼ばれる、弟子が一人前になるときの昇進儀礼においてである。ソ連時代にその開催は減ったが、近年では再び広く行われるようになってきている。また、1ヶ月に1度はすべきと言われ、特に仕事に何らかの支障を来たした時に行われるのが、イス・チカリシ (is chiqarish) などと呼ばれる儀礼である。窯のそばで鶏などをほふり、その血を窯に付け、ほふった肉を使って共食する。窯を新しくしたり仕事場を新たに開いた時もこれを行い、クルアーンを朗読してピールの加護を祈る。この他にブハラにある上述の陶業の二大ピールの廟へ詣でる巡礼は、ソ連時代にも余裕があれば年1度ほど行っていたといい、現在もピールの子孫への捧げ物を持って参詣すべきことが強く意識されている。そして日々の作業においてピールによる助力を請い、ピールが宿と言われる仕事場の清潔さに気を配り、そこでの飲酒を禁忌とする等の習慣は、ソ連時代の生産の集団化を経ても、陶工の作業現場で師匠から弟子へと受け継がれているといえよう。

ただし現在のピール崇敬は二極に分化しつつあり、一方はピールを「伝統」あるいは創造性の源泉などとして強く意識化しているが、もう一方はあまりピールに関する知識を持たず、ただぼんやりした畏怖の中でそれを捉えている様子である。このような当地のピール崇敬は、中央アジア定住地域のイスラーム信仰実践に関する研究にとって、多大な重要性を持つ切り口であろう。 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

¹人口は3万人 (2000年現在)。そのうち陶業に何らかの形で従事する住民が、3000人から5000人になると言われる。市の中心部ではタジク系住民が人口の約8割を占める。

²この調査は「ソビエト連邦時代を経たウズベキスタンにおけるイスラーム実践と解釈の研究」として日本学術振興会の平成13年度特別研究員奨励費を受けた。ここに記して深く感謝の意を表する。

写真：現在のリシタン陶工たち

